

古典シリア語新約聖書における、 いわゆる倫理与格の機能について

植 崎 勝 則

1 本論の目的

古典シリア語（以下シリア語）¹⁾には非分離前置詞として l- (lāmadh)²⁾ と b- (bēth) と d- (dālat) がある。これらのうち前二者はセム語全般に見られる前置詞で、もともと l- は方向“to”を、b- は場所“at, in”を示していた。d- は所有を示す前置詞として、また関係節を作る関係詞または関係代名詞として用いられ、ウガリット語や南アラビア語、アラム語にみられるものである。それら非分離前置詞のうちラーマド l- は方向を示す本来の意味から、動作の方向や受益者を表す「与格」を示すようになったと考えられる。さらに、ラーマド l- には他動詞の目的語を示すマーカーとして、必ずしも義務的ではない用法もある。

本論においては多くのラーマド l- の機能のうち、いわゆる倫理与格³⁾について論じる。シリア語新約聖書ペシッタ版を資料として用いて、倫理与格の用いられる文脈を詳しく検討し、倫理与格の出現する条件を仮定する。その仮説を使って、倫理与格の機能を特定することが本論の目的である。

1) シリア語はメソポタミアの都市エデッサを中心とするアラム語の一地方語である。アラム語は次のような年代に分けられる（高階 1985: 293）。(1) 古代アラム語（前10世紀～前700）(2) 公用アラム語（前700～前300/前200）(3) 中期アラム語（前300/前200～後200）(4) 後期アラム語（200～700または11世紀）(5) 現代アラム語。このように分けた場合シリア語は後期アラム語に属し、紀元1世紀から13世紀までの言語資料を提供する。シリア語はイスラムの大征服が原因となり、話し言葉としては7世紀後半には使われなくなった。しかしキリスト教の東方教会の典礼用語として、著作は13世紀まで続けられた。またシリア語の聖書は現代でもヤコブ派とネストリウス派の教会で使われている。

2) Muraoka (1997) では lamadh であるが Nöldeke (1898, rep. 1966: 2) では lāmadh と長母音で表記される。ここでは Nöldeke の表記に従いラーマドと呼ぶ。

[Moscatti 1964, 3rd pr. 1980: 121]

[Moscatti 1964: 113]

3) 倫理与格は、英語では ethical dative, ラテン語では dativus ethicus と呼ばれている。

2 倫 理 与 格

倫理与格は心性的与格ともいわれる。印欧語などにおける心性的与格については次のような記述が見られる [亀井他 1996: 1374]。

人称代名詞の与格を使って、話し手が、特に自分の、または相手の関心を引く情緒的な表現にみられ、したがって、話し言葉に用いられる。

上の記述は印欧語、またイディッシュ語を通して印欧語から導入された現代ヘブライ語に見られる倫理与格の現象を中心に考えて記述されたものである。シリア語の倫理与格への言及は見られない。

シリア語の名詞に格変化⁴⁾はない。したがって与格、さらに倫理与格、または心性的与格という用語は厳密には適用されない。しかし、シリア語においては、ラーマドトが前接した場合は与格であると習慣的に考えられている。そして特定の動詞の後に現れるラーマドトと人称代名詞との結合形が伝統的に倫理与格と呼ばれている。

次の二例は倫理与格のある場合とない場合を示している。

(2-1) qerbat l-āh 'lay-kwon malkwut-eh da- 'lāhā'
 draw near/pf.3.f.sg./DE onto-you/pl.m./kingdom-his of-God
 ἤγγικεν (εφ' υμας⁵⁾) ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ Luke 10, 11
 神の国が (あなたのもとに) 近づいた {ことを知れ}⁶⁾

(2-2) qerbat 'lay-kwon malkwut-eh da- 'lāhā'
 draw near/pf.3.f.sg./onto-you/pl.m./ kingdom-his of-God
 ἤγγικεν ἐφ' ὑμᾶς ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ Luke 10, 9
 神の国はあなたがたに近づいた {と言いなさい}。

上の例を見ると、例文 (2-1) では qerbat “draw near/pf.3.f.sg./” の後にラーマドト

4) シリア語名詞に格変化はないが、「位相」と呼ばれる次のような三種類の現れ方がある。以前は不定名詞として機能していたらうと思われる絶対位相、定名詞として考えられていたが後に不定・定の区別無く使われるようになった限定位相、複合名詞を作る構成位相の三種である。このうち絶対位相の使用はきわめて限られている。

5) 氣息記号やアクセント記号が付いていない括弧の中の文は、ギリシア語聖書本文に記されていないが、脚注に置かれて、写本間の異同を示している。

6) 日本語訳聖書は新共同訳を用いた。但し () は注5) で示したようにギリシア語テキストにおける () に対応する日本語を筆者が付加したもの、{ } は新共同訳から付加したものである。

と、主語、動詞の示す性・数と一致する非分離人称代名詞の前置詞句 l-āh/l-pr.3.f.sg./ がきている。その後に「あなたがたに」が来る。ところが例文(2-2)では qerbat の後に直接「あなたがたに」が続く。この前者に見られるラーマド l-と人称代名詞の結合形が倫理与格と呼ばれる。ラーマド l-が与格を示す前置詞であることから呼ばれるものである。Joosten (1989: 473-74) は倫理与格の定義を述べており、筆者もこれにほぼ同意する。

倫理与格の定義

- ① ラーマドと代名詞接辞からなる
- ② 代名詞接辞は人称・数・性で動詞の主語に一致する
- ③ 自動詞または他動詞の受動形と共に生じる
- ④ 動詞の直後に来て、動詞形と DE との間にはどんな語も入らない

但し④については「複合動詞の場合は、複合動詞の後ろに倫理与格が現れる」をつけ加える必要がある⁷⁾。従って④に関しては次の④' を定義とする。

- ④' 動詞の直後に来て、動詞形と DE との間にはどんな語も入らない。但し複合動詞の場合は、複合動詞の後ろに倫理与格が現れる

3 先行研究

Nöldeke 1898: 169 をはじめとする文法家も倫理与格への言及はある。倫理与格はしばしば動きを表す動詞と共に出現すると記述した上で、いくつかの例を挙げている⁸⁾。しかし、それらの記述には、義務的でない倫理与格の文法的機能への言及はない。この点に関して、Joosten 1989 は倫理与格の機能を精確に論究している。以下、彼の論を見ていく。

7) 但し Joosten の使っている verb-form が複合動詞を含むのであれば、筆者の蛇足となる。

8) 「再帰的な人称代名詞を伴う前置詞ラーマド l-は、動詞の意味を変更することなく、その動詞と共に起る (Dativus ethicus)。……例にも示されるように、頻繁に動作を示す動詞と共に起っている。……アフラテスの説教の中には受動の動詞の直後にしばしば使われている。」[Nöldeke 1898: 169, § 224]

そして次のような例を提出している。

npaq leh “er ging hinaus” Acts 12, 19, quwm lāk “ἀνάσθητι” Acts 10, 26, rehṭat lāh “sie lief” Ov. 161, 15, miytw lhwon “sind gestorben” Matt. 2, 20; Ov. 170, 8, zā'ty leky “μαίνη” Acts 12, 15, hwaw lhwon 'alāhe' sagiye “so gab es viele Götter” Aphr. 121, 1, 'etmalkat lāh 'abduwtā 'al zar'eh “seinem Samen wurde Knechtschaft verheissen” Aphr. 27, 10. この他に Nöldeke は hwā' leh qdāmay “ἐμπροσθέν μου γέγονε” John 1, 15, 30 を例として出しているが、ギリシア語の部分は誤写であり、γέγονεν が正しい。

「主語の物理的な又は精神的な面へ限定されている関係を持つ、そのような動詞の後で、意味に対しての影響無しに、代名詞接辞を伴うラーマド l-が存在する。」[Brockelmann 1981, 13 th ed.: 108, § 196]

そして次のような例を提出する。

npaq leh “ging hinaus”, miytw lhwon “sie starben”, ḥā'eb 'nā' liy “ich bin besiegt”, 'asbarw lhwon “sie glaubten”, 'eta'siy leh nḥiyry “meine Nase ist geheilt”.

3.1 Joosten 1989 の倫理与格の機能に対する仮説

Joosten の述べる仮説とは「倫理与格は『動詞に関連する状態に入る』⁹⁾ ことをあらわす」というものである。

彼は倫理与格が「である, となる」という意味を持つ状態動詞と共にした場合, 倫理与格の付いた動詞は「となる」という意味を一元的に持つようになる事実を述べる。その傍証として, 「ある状態になることのできる」動詞を挙げる。'zl “to go” や ḥšk “to be or become dark” は倫理与格を伴った結果として「行かれた状態」, 「暗くなった状態」になる。それに対して rqd (Pael)¹⁰⁾ “to dance” や ḡhk “to laugh” は倫理与格と現れることはない。その理由は「踊る」や「笑う」は単純には状態の結果となることはないためであるとする。

次にシリア語の形態論における事実を指摘する。基本形 Peal 動詞 $c_1\acute{a}c_2ac_3$ 形に対して, 標準的な受動分詞で形容詞のパターンである $c_1\acute{a}c_2i:c_3$ 形の他に, 第2根素を重複させた $c_1ac_2c_2i:c_3$ 形が動詞基本形の意味の「状態」を示す形容詞になると言う。しかも $c_1ac_2c_2i:c_3$ 形容詞を持つ動詞が倫理与格と非常に多く共起する事実を述べる。従って倫理与格は $c_1ac_2c_2i:c_3$ 形容詞で表された「状態に入る」ことを表している。それはシリア語話者にも気づかれなかったアスペクトの転換であると彼は結論づける。

3.2 Joosten 1989 が提出する, 仮説を支持する例 1

Joosten 1989 はまず次のような二例を提示する。

(3-1) zly mṭl hd' mlt' npq lh š'd' mn brtky

Go, because of this word the demon has gone out from your daughter.

Mark 7, 29

(3-2) w'zlt lbyth w'škḥt brth kd rmy' b'rs' wnpyq mnh š'dh

And she went home and found her daughter lying in bed and the demon was gone out from her.

Mark 7, 30

この例を British and Foreign Bible Society (BFBS) に基づいたシリア語聖書に従って母音を付与し, グロスを付けて, 更にギリシア語, 日本語の訳も付けて書き直すと, 次のよ

9) Joosten 1989 の原文は “entering into the state associated with the verb” である。

10) シリア語の動詞は Peal 形が基本形, Pael 形が強調形, Afel 形が使役形と一般に言われる。qtḏ “to kill” を例に取るのが一般的なもので, それに従うと, Peal 形は [qatʰal] であり, Pael 形は [qatʰʰel] であり, Afel 形は [ʔaqʰʰel] と各々の音が類推される。さらにそれらの基本形と派生形には再帰形があり, それぞれ Ethpeel 形 [ʔeθqʰʰel], Ethpaal 形 [ʔeθqatʰʰal], Ettafal 形 [ʔettaqʰʰal] という音が類推される。

うになる。

- (3-3) zely meṭul hāde' meltā' nraq l-eh
 go/impr.2.f.sg./ because of this/f.sg./ word/f.sg./ go out/pf.3.sg./ DE
 šī'dā' men barte-ky
 demon/f.sg./ from daughter-your/f.sg./
 διὰ τοῦτον τὸν λόγον ὑπάγε, ἐξελήλυθεν ἐκ τῆς θυγατρὸς σου τὸ δαμόμιον.
 ἐξ-έρχομαι/pres.pf.3.sg./ Mark 7, 29
 それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしま
 った。

- (3-4) we-'zalt l-bayt-āh; we-'škḥat bart-āh kad ramyā'
 and-go/pf.3.f.sg./to-house-her and-find/pf.3.f.sg./daughter-her when laid¹¹⁾
 b-'arsā'
 in-bed w-napiyq men-āh šī'd-āh.
 and-go out/c₁ac₂c₂i:c₃:ad.m.sg./ from-her demon-her
 καὶ ἀπελθοῦσα εἰς τὸν οἶκον αὐτῆς εὔρεν τὸ παιδίον βεβλημένον ἐπὶ τὴν κλίνην
 καὶ τὸ δαμόμιον ἐξεληλυθός.
 ἐξ-έρχομαι/pres.pf.part.neu.sg.Nom./ Mark 7, 30
 女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

彼は、これら二例は彼の仮説「倫理与格は『動詞に関連する状態に入る』ことをあらわす」を強力に支持すると考える。倫理与格を取って現れた動詞とその c₁ac₂c₂i:c₃ 形容詞の存在が、倫理与格が状態へ入っていくことを指示することができる根拠となると考えている。

3.3 Joosten 1989 が提出する、仮説を支持する例 2

さらに次の二例を提出する。彼は次の例は異なる福音書における例であること、そして文脈が異なることが重要であると考え。母音表記に加え、ギリシア語、日本語訳を付けた例を提出すると、以下のようなものである。

11) Joosten (1989) が提出する例文のグロスでは lying となっている。rmy' という子音を [ra:mya:ʔ] と音を取り、能動分詞、女性、単数、絶対位相と Joosten (1989) は解釈したと考えられるが、BFBS に基づく聖書では [ramya:ʔ] と音を取っていて、受動分詞、女性、単数、絶対位相である。BFBS に従い rmy' の辞書形 rm' [rəma:ʔ] を他動詞と解釈して、グロスは lying ではなく、laid が適切であると筆者は考える。

(3-5) w-kad rādeyn, dmek leh huw yešuw', wa-hwāt 'al'ālā'
 and-when traveling, sleep/pf.3.sg./ DE he Jesus, and-be/pf.3.f.sg./ storm
 d-ruwḥā' b-yamtā'
 of-wind in-sea
 πλεόντων δὲ αὐτῶν ἀφύπνωσεν, καὶ κατέβη λαίλαψ ἀνέμου εἰς τὴν λίμνην
 ἀφ-υπνώω/aor.3.sg/ Luke 8, 23
 渡って行くうちに、イエスは眠ってしまわれた。突風が湖に吹き下ろしてきて、

(3-6) w-hā' zaw'a' rabā' hwā'.... huw deyn yešuw' damiyk be/pf.3.m.sg./
 and-behold storm great be/pf.3.m.sg./ he but Jesus sleep/c₁ac₂c₂i:c₃ad.m.sg./
 hwā'
 be/pf.3.m.sg./
 καὶ ἰδοὺ σεισμὸς μέγας ἐγένετο αὐτὸς δὲ ἐκάθευδεν.
 καθ-εύδω/impf.3.sg/ Matt. 8, 24
 そのとき、湖に激しい嵐が起こり……イエスは眠っておられた。

Joosten 1989 はこれら二例も彼の仮説を支持し、倫理与格は、動詞で表された状態へ入っていくことを指示することができる根拠とする。

3. 4 Joosten 1989 の仮説、及びそれを支持する例の評価

さてここで、3. 1 で提出された仮説と、3. 2 と3. 3 で提出された、仮説を支持するための例を評価してみたい。

まず(3-3)の npaq leh「もう出てしまった」は完了形・三人称・男性・単数動詞 npaq「出る」に倫理与格が伴って出現している形である。それに対するギリシア語は ἐξεληλυθεν という ἐξ-έρχομαι「出て行く」の現在完了・三人称・単数の動詞である。一方、(3-4)の napiyq [nappi:q] は、同じく動詞 npaq「出る」の c₁ac₂c₂i:c₃ 形容詞であり、それに対するギリシア語は ἐξεληλυθός という前述の ἐξ-έρχομαι の現在完了分詞・中性・単数・主格である。倫理与格の付いている動詞がギリシア語の完了形に対応し、c₁ac₂c₂i:c₃ 形容詞がギリシア語の完了分詞に対応するという事実から、倫理与格を伴う動詞が、その動詞の c₁ac₂c₂i:c₃ 形容詞で表される状態へ入るという意味を示すと結論づけることは論理的でない。ギリシア語動詞は同一語彙の現在完了直説法と現在完了分詞というふうに異なっており、その違いをシリア語が同一動詞の異なる形式で表したと仮定しても何ら矛盾することはない。

同じことが(3-5)と(3-6)の例でも言える。(3-5)の dmek leh「眠ってしまわれた」は完了形、三人称、男性、単数動詞 dmek「眠る」に倫理与格が伴っている形である。それに対するギリシア語は ἀφ-υπνώω のアオリスト、三人称、単数の ἀφύπνωσεν である。

4 分析の方法と着眼点

4.1 仮説1

3節で Joosten 1989 の論文を詳しく検討し、その矛盾を指摘した。例(3-7)と(3-8)が示すように、文脈によって倫理与格が出現するか否かが決定される可能性がある。そこで第一の仮説を提示する。

仮説1：倫理与格は文脈上、言表事態と発話者または記述者との関係の緊密性を示す

上の仮説1は倫理与格の現れる環境に言及している。

4.2 仮説2

仮説1以外にも倫理与格の出現に関与的な要素があるかどうかを調べるために、シリア語新約聖書ベシッタ版を使用して、新約聖書内で倫理与格が最も共起する動詞 'ezal "to go" を観察する。

'ezal "to go" は新約聖書中に様々な活用形で447例出現する。そのうち倫理与格と共起するのは約6%¹²⁾の29例ある。それらを詳しく観察するため、出現する形式の完了形、未完了形、命令形、分詞それぞれの出現の度合いを見る。そのうちわけは次の通りである。「'ezal "to go" の活用形の出現数」をA、「DEを伴う出現数」をB、そしてAとBの「割合」をCとする。

4.2.1 完了形158例中17例 11%

三人称・男性・単数79例中13例 16%

	A	B	C		A	B	C
マタイ	: 18	0	0%	マルコ	: 11	1	9%
ルカ	: 16	1	6%	ヨハネ	: 14	4	29%
行伝	: 14	6	43%	2テモテ	: 1	1	100%
黙示録	: 5	0	0%				

3.f.sg.5例中0例 2.m.&f.sg.0例 1.c.sg.8例中0例

12) 割合を示す数字はパーセントの小数点以下を四捨五入している。

三人称・男性・複数 60 例中 4 例 7%

	A	B	C		A	B	C
マタイ	: 20	0	0%	マルコ	: 8	0	0%
ルカ	: 10	1	10%	ヨハネ	: 8	2	25%
行伝	: 10	1	10%	2 ペテロ	: 1	0	0%
ユダ	: 1	0	0%	黙示録	: 2	0	0%

3.f.pl.4例中 0 例 2.m.&f.pl.0例 1.c.pl.2例中 0 例

4.2.2 未完了形 78 例中 4 例 6%

三人称・男性・単数 25 例中 4 例 16%

	A	B	C		A	B	C
マタイ	: 3	0	0%	マルコ	: 2	1	50%
ルカ	: 8	2	25%	ヨハネ	: 1	0	0%
行伝	: 10	1	10%	黙示録	: 1	0	0%

3.f.pl. 19 例中 0 例 2.m.sg.4例中 0 例 2.m.pl.4例中 0 例 1.c.sg. 13 例中 0 例
1.c.pl. 13 例中 0 例

4.2.3 命令形 84 例中 6 例 7%

男性・単数 43 例中 4 例 9%

	A	B	C		A	B	C
マタイ	: 14	2	14%	マルコ	: 5	1	20%
ルカ	: 9	1	11%	ヨハネ	: 4	0	0%
行伝	: 10	0	0%	黙示録	: 1	0	0%

男性・複数 30 例中 2 例 7%

	A	B	C
マタイ	: 13	2	15%

f.sg.7例中 0 例 f.pl.4例中 0 例

4.2.4 分詞 117 例中 2 例 2 %

cont.3.m.sg. 32 例中 0 例 cont.3.m.pl. 26 例中 0 例 cont.3.f.sg. 13 例中 0 例
 cont.3.f.pl. 1 例中 0 例 cont.2.m.sg. 8 例中 0 例 cont.2.m.pl. 2 例中 0 例

分詞・文脈上一人称共通性・単数 31 例中 2 例 6 %

	A	B	C
ヨハネ	: 14	1	7 %
行伝	: 4	1	25 %

cont.1.c.pl. 3 例中 0 例 cont.3.m.pl. 構成位相¹³⁾ 1 例中 0 例

4.2.5 観察の評価

以上の観察から明らかになったことは、(i) 倫理与格は完了形及び未完了形、三人称、男性、単数の動詞と最も多く現れること、(ii) 分詞と倫理与格との共起の割合が極端に少ないこと、(iii) その他では平均的であること、さらに、(iv) マタイによる福音書では倫理与格は命令形とのみ現れることである。

(iv) に見られる現象をここで仮に「命令与格」と呼ぶ。この命令与格はシリア語と同じ北西セム語派に属するヘブライ語において顕著である¹⁴⁾。シリア語の命令文には次に見るように、命令与格付き命令文と命令与格の付かない命令文とが存在する。これは英語の命令文を連想させる。

13) 'āzaly be'pe' [a:zay belfe] 「航海する者」の場合の、分詞が名詞的に使われた 'āzaly のことである。

14) Gesenius 1985: 381 § 119s によると倫理与格 (dativus ethicus) を利益を表す与格 (dativus commodi) の箇所を導入し、大部分が命令形の後ろで、ラーマド 1- と二人称代名詞との結合形が使われると述べる。例として、lek-ləkā "go, get thee away" Gn. 12, 1 ; 22, 2 ; Dt. 2, 13 ; Ct. 2, 10 ; 2, 13, nəṭēh ləkā "turn thee aside" 2 S. 2, 21, mə'wu lākem "take your journey" Dt. 1, 7, 'ibrwu lākem "pass ye over", bəraḥ lākem "flee (to save thyself)" Gn. 27, 43, 'āliy-lāk "get thee up" Is. 40, 9, pənwu lākem "turn you" Dt. 1, 40, šwubwu lākem "return ye" Dt. 5, 27, qwumiy lāk "rise up" Ct. 2, 10, šəbwu lākem "abide ye" Gn. 22, 5, ḥādāl ləkā "forbear thee" 2 Ch. 35, 21 ; (pl. Is. 2, 22), hābwu lākem "take you" Dt. 1, 13 ; Jos. 18, 4 ; Ju. 20, 7 ; 2 S. 16, 20, hišāmər ləkā "cave tibi!" Ex. 23, 21 ; Jb. 36, 21 ; Dt. 24, 8 ; 2 K. 6, 9, hišāmərwu lākem "take heed to yourselves", dəməh ləkā "be thou like" Ct. 2, 17 ; 8, 14。倫理与格は命令形以外にも共起する例は少数あることを示す。ワウ継続の完了形 1 K. 17, 3 ; 1 S. 22, 5, ワウ継続の未完了形 Is. 36,9 watibṭah ləkā "and putttest thy trust"。

(4-1) zel l-duwktā'
go /imper.2.m.sg./ to-the place. ⇒ Go there.

(4-2) zel l-āk l-duwktā'
go /imper.2.m.sg./ DE to-the place ⇒ You, go there.

上の例(4-2)に現れる英語文の二人称代名詞は、他の誰でもない「あなた」が行くことを発話者が強く望み、命令している。これは行為者を特別に指定するという機能がある。この機能をここで「取り立て」と呼ぶことにする。この取り立て機能を倫理与格に援用して次の仮説2を提示する。

仮説2：倫理与格は、取り立て機能を有する

4.3 仮説3

さらに、4.2の観察から分かるように、完了形・未完了形の両方で三人称・男性・単数の倫理与格の出現の割合が多い。このことから倫理与格は主語の特異性に深い関係があると仮定できる。つまり、主語がイエスであるとか、パウロであるとかが倫理与格の出現に影響を与えると考えられる。そこで、次の仮説3を提示する。

仮説3：主語の特異性が倫理与格の出現に関与する

このことは、主語が話し手、または書き手にとって無視できないほど重要であるという意味である。重要度が高いことが問題となるので、主語は人間だけにとどまらず、「神の国」である可能性もある。

4.4 仮説4

最後に、ラーマド1と三人称・男性・単数の人称代名詞の結合形式の音、[leh]に注目する。1節で見たように、ラーマド1は元来方向を示すために使われた前置詞である。次の(4-3)のように、「行く」の後には本来は場所が来るが、その場所が(4-4)のように省略された場合を考える。「町」は女性名詞なのでl-ah (l-her)が当然期待されるが、代名詞も省略されたと考えたらラーマド1のみが残る。しかしラーマド1は拘束形態素なので後続要素を必要とする。その時母音が補充されることが期待される。ギリシア語をシリア語に取り入れる時に挿入される母音がeであるという事実がある。例えばsで始まるギリシア語 *οχολή* に対して 'eskowle:' となりデフォルトの母音はeであると考えられる。

そのように仮定すると、次のようなプロセスを考えることができる。

(4-3) 'ezal l-amdiyntā'.
go/pf.3.m.sg./ to-the town /f.sg.emp./

(4-4) 'ezal l-φ (⇒ l-eh)
go/pf.3.m.sg./ to-φ (⇒ to-it /pr.3.m.sg./)

上の推論から次の仮説4を提示する。

仮説4：倫理与格は方向を示すラーマド l-の本来の機能の言語化である可能性を持つ

仮説4の有効性を確かめるために、次の2例を観察する。

(4-5) w-šabq-āh l-iyhwud; we-'zal l-eh twub
and-leave/pf.3.m.sg./ -her l-Judah; and-go/pf.3.m.sg./ DE again
l-agliylā'.
to-Galilee.
ἀφῆκεν τὴν Ἰουδαίαν καὶ ἀπῆθεν πάλιν εἰς τὴν Γαλιλαίαν. John4, 3
ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

(4-6) w-bātar treyn yawmiyn; npaq yešwu' men tamān. we-'zal l-agliylā'.
and-after two days; go out Jesus from there. and-go/pf.3.m.sg./to-Galilee
Μετὰ δὲ δύο ἡμέρας ἐξῆλθεν ἐκεῖθεν εἰς τὴν Γαλιλαίαν. John4, 43
二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。

これら2例の文の種類は物語の地の文であり、文の種類としては同質である。主語がイエスであることも等しい。異なる点は(4-5)には倫理与格があり、その後ろに副詞 twub “again” があるの対し、(4-6)にはそのどちらもない点である。

(4-5) の文に於いて、動詞 'ezal “to go” と l-agliylā “to-Galilee” は副詞 twub “again” によって分離される。動詞 'ezal “to go” は次に行く場所と密接に連なっている。そこで一旦方向を示すラーマド l-が意識される。しかし副詞 twub “again” が動詞と場所の間に入ることによって、一旦意識された方向のラーマド l-は裸のまま副詞より動詞寄りの位置に残る。それが言語化されたのが倫理与格と考えることができる。

この仮説は、例えば主語が一人称・単数の場合はラーマド l-に一人称・共通性・単数の人称代名詞の付いた l-iy という形式が生じることを妨げない。その時には主語の取り立てを示す仮説2が働くと考えられるからである。

この仮説4は、従来の多くの文法家が倫理与格について述べた「運動を示す動詞と共起することが多い」という記述を十分に説明する。

5 仮説を使った分析

4節において導入した仮説1から仮説4を使って実際の例を分析する。実際の例に対して仮説1が適用される状況をAとし、仮説2が適用される状況をBとし、仮説3が適用される状況をCとし、仮説4が適用される状況をDとする。

仮説1：A＝倫理与格は文脈上、言表事態と発話者または記述者との関係の緊密性を示す

仮説2：B＝倫理与格は、主語の取り立て機能を有する

仮説3：C＝主語の特異性が倫理与格の出現に關与する

仮説4：D＝倫理与格は方向を示すラーマド1-の本来の機能の言語化である可能性を持つ

5.1 該当する倫理与格の「値」の導入

上記の四つの仮説を用いてまず(2-4)を分析する。

(2-4) qerbat l-āh 'lay-kwon malkwut-eh da-'lāhā'
 draw near/pf.3.f.sg./ DE onto-you (pl.m.) kingdom-his of-God
 ἤγγικεν (εφ υμας) ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ

Luke 10, 11

神の国が(あなたがたに)近づいた {ことを知れ}

これは、イエスが弟子たちに福音を伝える旅の仕方を話している会話の中に現れる。10節の最後から書くと、「……こう言いなさい。『足についたこの町の埃さえも払い落として、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』……」となる。(2-4)はこの文の一部である。従属節ではあるが、いわゆる場面指示的であり、記述者との緊密性があると考えられるので、仮説1については値Aを取る。主語は「神の国」というキリスト教の中心概念であり、「他のものではなく『神の国が』近づいた」と考えられるので、仮説2の取り立ての値Bを取る。同じく「神の国」の特異性は4章3節で述べたとおり、高いと考えられるから仮説3の値Cを取る。「あなたがたに」は場所ともとれるが、明確な場所ではないので、ここではそのようには取らない。従って、仮説4はこの例では該当しない。仮説1から仮説4までを総合して値として示すと、[A, B, C, 0]となる。これが(2-4)の値である。

さらに(3-1)の例を分析すると次のようになる。

- (3-1) 'amar l-āh yešwū. zely meṭul hāde' meltā'
 say/ap.m.sg./l-her Jesus. go/impr.2.f.sg./ because of this/f./ word
 nraq leh
 go out/pf.3.sg./ DE šī'dā' men barte-ky
 demon from daughter-your /f.sg./ Mark 7, 29
 καὶ εἶπεν αὐτῇ· διὰ τοῦτον τὸν λόγον ὑπαγε, ἐξελήλυθεν ἐκ τῆς θυγατρὸς σου τὸ
 δαιμόνιον. ἐξ-έρχομαι /pres.pf.3.sg./
 そこで、《彼女に》イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りな
 さい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」

これは会話文の中であり、イエスと女性の間で交わされたものとして場面指示的であり、やはり記述者との緊密性が感じられるので、仮説1については値Aを取る。主語は「悪霊」であり、他ならぬあなたの娘に憑いた悪霊として取り立てを行っている。従って仮説2の取り立ての値Bを取る。「悪霊」は普通の主語とは異なるという意味で特異である。従って仮説3の値Cを取る。「あなたの娘から」は場所ともとれるが、明確な場所ではない。従って、仮説4はこの例では該当しないので値Dを取らない。仮説1から仮説4までを総合して示すと、[A, B, C, 0]となる。これが(3-1)の値である。

5.2 導入した「値」の有効性

5.1で導入した倫理与格の各「値」がどのように有効であるかを検証する。検証の方法として、倫理与格を伴う動詞の例と、同じ動詞で倫理与格を伴わない例を比較する。倫理与格を伴わない例の分析として、仮説1から仮説4の値[A, B, C, D]に対応する、各々の仮説から倫理与格の存在を排除した値[a, b, c, d]を導入する。

検証仮説1：a = 言表事態と発話者または記述者との関係が緊密である

検証仮説2：b = 主語が取り立てられるに値する

検証仮説3：c = 主語が特異性を持っている

検証仮説4：d = 動詞の直後、または近接してラーマド1-を伴う場所が来ている
 まず、次の二例を検証する。

- (2-4) qerbat l-āh 'lay-kwon malkwut-eh da-'lāhā'
 draw near/pf.3.f.sg./ DE onto-you/pl.m./ kingdom-his of-God
 ἤγγικεν (εφ υμας) ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ Luke 10, 11
 神の国が《あなたがたに》近づいた(ことを知れ)
- (2-5) qerbat 'lay-kwon malkwut-eh da-'lāhā'
 draw near/pf.3.f.sg./ onto-you/pl.m./ kingdom-his of-God

ἤγγικεν ἐφ' ὑμᾶς ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ Luke 10, 9
 神の国はあなたがたに近づいた（と言いなさい。）

(2-4) の値は上記 5 章 1 節より [A, B, C, 0] である。(2-5) については [0, b, c, 0] と考えられる。(2-5) において a 要素が 0 であるのは、文脈に依存する。ルカの 10 章 9 節は温かく迎えられた時の対応である。それに対して 11 節は冷たく対応されたときの怒りを表現している。その時発話者は 9 節よりも 11 節の方が言表事態に対してより緊密である。ギリシア語は同一の形であるが、シリア語聖書書記者が二つの場面に違いを感じて、それを倫理与格で表したと考えることができる。

以上から微妙な差を記述するのに筆者が 4 章で導入した仮説 1～4 は有効であることが分かる。

6 まとめとこれからの課題

本論の前半では Joosten 1989 の提示した倫理与格の機能に関する仮説、「倫理与格は『動詞に関連する状態に入る』ことをあらわす」の適用が困難な例を示すことによって、この仮説が恣意的なものであることを証明した。さらに Joosten 1989 が発見し指摘した「倫理与格と $c_1ac_2c_3i:c_3$ 形容詞との共起」は $c_1ac_2c_3i:c_3$ 形容詞の意味を倫理与格が示していると結論づけるところに論理の整合性は見られないことも示した。

また、後半では、Joosten 1989 の仮説に対して、筆者は倫理与格には「心性的与格」の側面と形態的な側面が関与すると考え、仮説 1 から仮説 4 を提示した。そしてそれらの仮説が同じような文脈を持つ時、倫理与格の出現条件として非常に有効であることを示した。

しかし同様な文脈が多く存在することは期待できない。補遺に示すシリア語新約聖書に現れる倫理与格と共起する 45 個の動詞、計 194 例を文脈の中で精確に分析することにより、さらに詳しい倫理与格の出現条件が導き出せるものと思う。

参考文献

- Brockelmann, Carl (1960) *Syrische Grammatik*. Leipzig: VEB Verlag.
 Gesenius (1985) *Hebrew Grammar*. Oxford: Clarendon Press (2nd ed.).
 Joosten, Jan (1989) The function of the so-called Dativus Ethicus in Classical Syriac. *Orientalia* 58: 473–92.
 Kiraz, George A. (1993) *Concordance To the Syriac New Testament*. Leiden.
 Moscati, Sabatino (1964) *An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages*. Otto Harrassowitz: Wiesbaden (1980 3rd pr.).
 Muraoka T. (1997) *Classical Syriac*. Harrassowitz Verlag: Wiesbaden.

- New Testament (1979) *Syriac Bible*. 63 DC United Bible Societies.
- (1996) Nestle-Aland. *Novum Testamentum Graece*. 27 th ed. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.
- Nöldeke, T. (1898) *Kurzgefasste Syrische Grammatik*. (2 nd ed. rep. 1966). Wissenschaftliche Buchgesellschaft: Darmstadt.
- Old Testament (1913) *Ancient Syriac Old Testament*. London.
- (1984) *Biblia Hebraica Stuttgartensia*. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.
- J. Payne Smith (Mrs Margoliouth) (1903) *A Compendious Syriac Dictionary*. Oxford: The Clarendon Press.
- 高階美行 (1985) 「アラム語の世界」『アフロアジアの民族と文化』(民族の世界史 11) 山川出版社, 288-310.
- 『聖書』新共同訳 (1987) 日本聖書協会.
- 亀井孝他編 (1996) 『言語学大辞典』術語編 三省堂.

補 遺 1

シリア語新約聖書の中に倫理与格と共に出現する動詞のリスト¹⁵⁾。

1. 'ebad 滅びる (2 / 1 Cor. 8, 11; 1 Cor. 15, 18)
2. 'ezal 行く (28/ Matt. 4, 10; Matt. 10, 6; Matt. 16, 23; Matt. 25, 41; Mark 3, 7; Mark 5, 17; Mark 8, 33; Luke 4, 42 a; Luke 4, 42 b; Luke 8, 37; Luke 9, 56; Luke 13, 31; John 1, 37; John 11, 31; John 11, 54; John 12, 19; John 16, 5; John 16, 28; Acts 1, 25; Acts 9, 26; Acts 10, 7; Acts 12, 17; Acts 13, 13; Acts 15, 39; Acts 18, 6; Acts 18, 22; Acts 20, 1; 2 Timothy 4, 10)
3. 'eħad 行われる (1 / Acts 27, 20)
4. 'elaš 苦しむ (1 / 1 Peter 2, 20)
5. 'etā 来る (15/ Mark 1, 14; Mark 6, 31; Luke 6, 8; John 4, 3; Acts 12, 12; Acts 13, 13; Acts 13, 51; Acts 14, 21; Acts 14, 24; Acts 14, 26; Acts 15, 30; Acts 16, 8; Acts 18, 1; Acts 20, 2; 2 Cor. 12, 1)
6. 'etbaṭal 関係がない (1 / Galatians 5, 4)
7. dmek 眠る (2 / Mark 14, 37; Luke 8, 23)
8. d'ek 消える (1 / Matt. 25, 8)
9. hwā'~である, ~となる (19/ Mark 10, 21; John 1, 15; John 8, 55; Acts 27, 9; Romans 2, 25; Romans 7, 3; 1 Cor. 3, 18; 1 Cor. 13, 1; 1 Cor. 14, 9; 1 Cor. 14, 11 a; 1 Cor. 14, 11 b; Ephesians 4, 28; 2 Timothy 2, 18; Hebrews 5, 11; Hebrews 5, 12; Hebrews 6, 8; Hebrews 11,

15) 括弧の中は(出現回数 / 出現箇所)のように見る。

- 1 ; Hebrews 12, 8 ; 2 Peter 2, 20)
10. hpak 返る (9 / Luke 2, 43 ; Luke 2, 45 ; Luke 17, 15 ; Acts 1, 12 ; Acts 7, 39 ; Acts 8, 25 ; Acts 20, 3 ; 1 Cor. 7, 18 ; Galatians 4, 9)
 11. zā' 揺れる, 気が狂う (2 / Acts 12, 15 ; Acts 21, 31)
 12. ḥāb 有罪である (1 / 1 Cor. 6, 7)
 13. ḥšek 暗くなる (1 / John 6, 17)
 14. ʔā' 踏み外す (1 / 1 Timothy 6, 21)
 15. yiqar 重くある (1 / Luke 9, 32)
 16. yiteb 座っている (9 / Matt. 13, 2 ; Matt. 22, 44 ; Mark 4, 1 ; Mark 12, 36 ; Luke 10, 39 ; Luke 20, 42 ; John 4, 6 ; Acts 2, 34 ; James 2, 3)
 17. kpar 信仰を捨てる (1 / 1 Timothy 5, 8)
 18. myit 死ぬ (10 / Matt. 2, 20 ; Mark 9, 26 ; Luke 8, 49 ; Luke 8, 53 ; John 11, 14 ; John 19, 33 ; John 4, 49 ; Acts 14, 19 ; 2 Cor. 5, 14 ; Colossians 3, 3)
 19. mʔā' 来る (3 / Matt. 24, 33 ; Matt. 26, 18 ; 1 Peter 4, 7)
 20. mlā' 満ちる (1 / Acts 24, 27)
 21. nḥet 下る (5 / Acts 8, 5 ; Acts 13, 4 ; Acts 14, 24 ; Acts 17, 14 ; Acts 25, 6)
 22. npaq 外にでる, 下る, 出発する (12 / Matt. 21, 17 ; Mark 7, 29 ; John 10, 39 ; John 13, 30 ; John 18, 38 ; Acts 12, 19 ; Acts 14, 14 ; Acts 14, 20 ; Acts 16, 19 ; Acts 20, 7 ; Acts 22, 18 ; 2 Cor. 2, 13)
 23. sba' 満腹である (1 / 1 Cor. 4, 8)
 24. sleq 登る (5 / Mark 2, 4 ; Luke 5, 19 ; Luke 19, 4 ; Acts 1, 13 ; Acts 21, 15)
 25. smak 留まる >'estamk 席に着け (1 / Luke 14, 10)
 26. sriy 腐る (1 / John 11, 39)
 27. ʔbar 越える, 渡る, 去る (5 / Mark 4, 35 ; Romans 2, 25 ; 1 Cor. 7, 31 ; 2 Cor. 5, 17 ; 1 John 2, 8)
 28. ʔal 行く (4 / Acts 14, 1 ; John 9, 21 ; John 9, 23 ; Hebrews 4, 6)
 29. ʔraq 逃げる (3 / Matt. 10, 23 ; Acts 16, 27 ; Acts 27, 42)
 30. pās とどまる (3 / Luke 2, 43 ; John 7, 9 ; 2 Timothy 4, 20)
 31. plag 分ける >'etpalag 差別される (1 / James 2, 4)
 32. praq 分かれる (5 / Matt. 9, 24 ; Luke 5, 8 ; Luke 13, 27 ; Acts 5, 38 ; Acts 22, 29)
 33. šrā' 裂く >'eštariy 離れる (1 / 1 Timothy 5, 11)
 34. qām (qwm) 立つ (8 / Matt. 28, 6 ; Mark 16, 6 ; Luke 24, 6 ; Acts 9, 39 ; Acts 10, 26 ; Acts 17, 5 ; Acts 26, 30 ; Acts 27, 18)
 35. qreb 近づく (9 / Matt. 3, 2 ; Matt. 4, 17 ; Matt. 12, 28 ; Luke 10, 11 ; Luke 11, 20 ; Luke 11, 20 ; Luke 21, 28 ; Luke 21, 30 ; James 5, 8)
 36. rḥq >'arḥeq 遠くへ行く (2 / Matt. 7, 23 ; Romans 16, 17)
 37. rken 傾く (1 / Luke 24, 29)
 38. šḥet 錆びつく (1 / James 5, 3)

39. štā' あやまつ (1 / Romans 1, 22)
 40. šliy 関係を絶つ, 静まる (2 / Acts 11, 18; 1 Peter 4, 1)
 41. šlem 満ちる (1 / Mark 1, 15)
 42. šniy 気が狂う, 出発する (7 / Matt. 4, 12; Matt. 12, 15; John 5, 24; John 6, 15; Acts 16, 39;
 Acts 26, 24; 1 Cor. 14, 23)
 43. šrā' 滞在する (2 / Acts 16, 15; Acts 18, 3)
 44. šteq 静かにする (3 / Acts 12, 17; 1 Cor. 14: 28; 1 Cor. 14, 30)
 45. tmah 驚く (1 / Acts 12, 16)

省略記号

- | | |
|---|---|
| 1. 一人称 | Jb. ヨブ記 |
| 2. 二人称 | Jos. ヨシヨア記 |
| 3. 三人称 | Ju. 土師記 |
| ad. 形容詞 | m. 男性 |
| aor. アオリスト | Matt. マタイによる福音書 |
| Aphr. The Homilies of Aphraates
(ed. by W. Wright) | neu. 中性 |
| ap. 能動分詞 | Ov. S. Ephraemi Syri, Rabulae Episcopi Edesseni,
Balaei Aliorumque Opera Selecta
(ed. by J. Jos. Overbeck). |
| c. 共通性 | Pa. バエル |
| 2 Ch. 歴代誌下 | part. 分詞 |
| cont. 文脈上 | pas. 受動 |
| 1 Cor. コリントの信徒への手紙 1 | 1 K. 列王記上 |
| 2 Cor. コリントの信徒への手紙 2 | 2 K. 列王記上 |
| Ct. 雅歌 | pf. 完了形 |
| DE 倫理与格 | pl. 複数 |
| Dt. 申命記 | pr. 代名詞 |
| emp. 限定位相 | pres. 現在 |
| Ex. 出エジプト記 | rep. reprint |
| f. 女性 | 1 S. サムエル記上 |
| Gn. 創世記 | 2 S. サムエル記下 |
| impf. 未完了形 | sg. 単数 |
| impr. 命令形 | |
| Is. イザヤ書 | |

(京都大学留学生センター非常勤)